ISSN 0289-9191

台湾情報誌

交流

2015年10月 vol.895
公益財団法人 交流協会
Interchange Association,Japan

台湾俳句史～結社と俳誌～

交流

2015年10月
vol. 895

目次 CONTENTS

台湾俳句史（1985～2013）（1）
～結社と俳誌～ …… 1
（呉昭新）

鹿港民俗文物館・中国信託商業銀行「文薈館」を訪ねて
～辜振甫氏・辜濂松氏を偲ぶ（後編）～ …… 8
（根橋玲子）

台北の歴史を歩く　その28（最終回）
訪ねてみたい台北市内の歴史再生空間 ……14
（片倉佳史）

ワクワク・ドキドキ・感動はすべての人に与えられた権利である …23
（寺田真実）

台湾通信
「カラスガイナイ・・・ゴミヤシキガフエル！？」……31

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。
※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。
万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

交流協会について

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972 年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。
東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

台湾俳句史（1985～2013）（1）

～結社と俳誌～

呉昭新（医師・俳人）

６月号では、台湾においても日本の俳句が息づいており、台北にある俳句会では様々な立場の方が俳句を詠み合い、日本語で交流を深めている様子をご紹介致しました。今月号より、台湾の医師で、台湾における医療分野での功労者（脚注１）であるとともに、特に俳句に対して深い見識をお持ちの呉昭新先生による、日本語での手記となります。俳句が台湾に根付いてきたその歴史とそこから見え隠れする台湾俳句の未来について、３回に分けてご紹介します。

脚注１．呉医師は、台湾中山医学大学付属医院院長、省立台北医院院長、台湾衛生署（現福利衛生部、厚生労働省に相当。）国立予防医学研究所所長及び検疫総所所長を歴任している。

俳句は「俳句」、「HAIKU」として今や世界中のあらゆる言葉を使う人々に受け入れられている。だが俳句の源泉国である日本ではどうかと言うと、まだまだ大多数の俳句ファンは、俳句は日本語で定型有季、花鳥諷詠でなくてはならないと思い込んでいる、または強引に主張する人さえいる。

「HAIKU」は日本語以外の言葉（外国語）で詠まれる俳句で、漢字だけで詠まれる「漢語俳句」をも含み各言語で普及しているが、その定則には一定の規制はなく、ただ一番短い三行詩だという理解で受けいれられている。外国語といえば一応アクセントというのがある、それでアクセントを気にする方もいるが、相手にしない方もいる。季節にいたっては南半球と北半球ではまったく反対であり、国や地域によっても大いに違っているし、季節がない地域もあるので、共通の季語は不要と考える人など、さまざまである。また季語を入れても季感をなさず、季語本来の意味をなくしているので、取らぬ人も多けれど、他方日本の伝統派に倣ってなんとか季語を入れる人もいる。が、季感がない。季語ではなく生活、社会に関するキーワードを使う人もいる。いずれにせよ、「HAIKU」は短詩の一ジャンルとして世界的な広がりを見せている。米英を中心に英語俳句があり、アジアでは諸言語で俳句が詠まれている、とくに漢語系諸国では漢俳として, 中国で持てはやされているが、後述するように、「漢俳」は一種の短詩ではあるが絶対に俳句ではない。（世界俳句第７巻、2011、参考）。

明治の日本で子規が客観写生を提唱したその時期に、西欧では、日本から伝わった芭蕉や一茶の発句が、西欧諸国語に翻訳された。俳句の翻訳は詩としての詩情内容を損なわず、相当的確に翻訳されるのが可能であることが証明された、ただ日本語特有の掛詞、文化的記憶を除いてのことである。それは俳句が短く、難しい言い回しがないからである、そしてなぜ俳句が翻訳可能であったかというと、俳句の詩的本質が、五七五の韻律に依存するものではなく、日本語以外では五七五の定型は無視され、意味のない季語は外されたからである。そして逆に、西欧では詩に不可欠と考えられていた押韻が、詩の本質にとっては必ずしも重要な要素ではないことが、各国語に翻訳された俳句によって明らかにされた。欧州理事会のヘルマン・ヴァンロンプイ常任議長は、句集『Haiku』まで出している。そして議長は『俳句は翻訳可能だ

と話している。俳句は押韻なき詩であるがゆえ、俳句はどのような言語によっても、作ることができる、そして作られたのである。一般に俳句には韻律がないと言うが、日本語俳句には575の律があり、外国語では押韻しようと思えば出来ないことでもない、口ずさんで、または読んで佶屈聱牙でなく、耳に楽しければ、鮮明なる外在韻律がなくても、俳句には詩想のうえで感じられる内在律があるのである。

これらはさておき、この小文においては、広い意味の俳句（HAIKU）の立場から台湾の俳句事情または俳句史について述べさせていただきたい。

さて、台湾での俳句事情はどうかと言うと、その他の地域とは大分違っている。ブラジルは日本から言えば遠くて近いところ、そして台湾は近くて遠いところといわれている、その理由はともかくとして、この二つの場所は日本語事情については似ているといわれている（ハワイでも同じことが言える）。というのは、ブラジルと台湾の人たちは戦前までは日本語が他の国よりも日常生活に多く使われていたからである、でも使う人達そのものは違っていた。ブラジルではブラジルに移民した元日本人であり、一方台湾人は日本に統治されていた異民族であるがゆえ、前者においては戦前戦後において日本語の使用の原点には変わりはなかった（三世になると日本語を話す者がすくなくなった）、が台湾においては、戦後日本語は禁止されたばかりでなく、敵国語として不倶戴天の仇の立場におかれた、それ故戦後における日本語の使用事情はまったく違っていた、日本語を慣用する台湾人は一夜にして文盲になったのだ。

台湾が日本の統治下になったのは1895年（明治28年）、子規が客観写生を説き「ほととぎす」の創刊を指導したのが1897年（明治30年）、そして台湾での日本語教育は伊澤修二らによってすぐ始められた。最初は六名の教師が原住民部族の襲撃によって惨死するなどの悲劇があったが、漸次小学校、中学校、高等学校、師範学校、各種専門学校、帝国大学の設立があり、爾来終戦当時にいたるまで50年の間に日本語教育を受けた台湾人の数は日に増し、教育機関数の統計記録から大よその推定ができる。1900年頃の台湾総人口数は約300万人、終戦二年前の1943（昭和18年）年の統計では、約600万の人口で、内日本人は約60万人である。そして台湾人児童の就学率（義務教育）は男子93%、女子85%、1920年代（大正後期）の33%に比較して大幅の躍進が見られる。1944年4月において、国民学校1,099校、児童数932,525人（台湾人、867,748人）、中等教育での中学校は22校、生徒数15,172人（台湾人7,881人）、高等女学校22校、生徒数13,270人（台湾人4,853人）である、それに各種実業学校は計27校、生徒数14,626人（台湾人9,194人）で、高等学校以上の学生数は含まれていない。このほか、島内での進学に阻まれた多くの台湾人学生は、家況が許す限り、多くの者が、自由に入学を制限されていない本土の学校へ進学した。つまるところ、終戦当時、1910以後出生した人たちはみな日本語をよくする人たちであるという事実である（一部の者の台湾訛りを問わなければ）。

さて私が言いたいのは、終戦をメルクマール（判断基準）としてみる時、台湾人で中学までの教育を受けた人たちは俳句を詠もうと思えば日本人と同じ能力を持っていた、それゆえその時点、特にそれ以前35年間における台湾の俳句事情は在台日本人と台湾人を問わず、日本本土におけるのと同じである。ということは日本で俳句がどういう人たち、社会層、年齢層に受け入れられているか、また俳句結社、俳誌や有季定型、自由律，無季非定型などの絡みについては、台湾でも日本本土と同じであると言うことである、たとえば小学校や中学で教わる俳句、女性や高齢者に俳句を詠む方が多いことなど。が、事実は少しズレがあった、台湾人日本語習得人口と俳句趣味人口は比例しな

かった。俳句人口は、藤田芳仲「台湾俳壇展望」（昭和7年9月『台湾時報』154号42頁）に拠ると、昭和7年頃の台湾の俳句人口は約6700人であったが、その内の4500人は「ゆうかり」派で、後の2200人は他の派の俳人であったと言う。

台湾での日本統治時代における俳句事情に関しては近10年来、台湾または日本で日本文学を専攻された人たちや日本で台湾の日本語文学に興味を寄せた人たちによってすでに多くの整理研究がある（阮文雅、沈美雪、蘇世邦、周華斌）ほか、日本人の島田謹二の「正岡子規と渡辺香墨」、「続香墨論」また阿部誠文、磯田一雄らによっても紹介されている。ただ外国語俳句「HAIKU」については、まだである。

この小文においては、（一）結社、俳誌、（二）季題、季語、歳時記、（三）日本語俳句、外国語俳句（HAIKU、漢語俳句）、ネット俳句について項を分けて年代順に述べさせていただく。また日本統治時代の俳句事情については上掲諸氏の研究論文から引用させてもらい、戦後における俳句およびHAIKUについて、そして台湾人の跨言語世代の様相については、私見を述べさせていただくつもりである。

（一）結社と俳誌：

1．『相思樹』：日本派

俳誌『相思樹』は台湾最初の俳誌である（明治37．5～43．2）、その後50年の間に台湾で発行された俳誌は20種ちかくあり、よく話題にのぼるのは『ゆうかり』で1921年から終戦時（1945年）まで続いた。

台湾は明治28年（1895）に清国より日本に割譲された。沈美雪氏によると台湾における俳句受容は、旧派も新派もほぼ同時期に並行して流入してきたとされている。初期の台湾俳壇は日本人のみで、『台湾日日新報』の俳句欄「日々俳壇」の選者を勤めた高橋窓雨などの旧派宗匠がリードしていたが、子規の高弟である渡辺香墨の台湾赴任により、新派俳人は指導者を得て、台湾に移住した日本人の間には、子規の俳句革新に同調する俳人もかなり増え、『ホトトギス』が創刊されると子規の俳句革新の主張に賛同する台湾在住俳人が、台湾の風物を読み込んだ句を『ホトトギス』に発表するようになった。『ホトトギス』創刊（1897）の翌年にはすでに台湾在住の俳人の投句も見られた。窓雨は明治30年（1897）6月に渡台し、明治31年（1898）に『台湾日日新報』が発刊されて以来、同紙の俳句欄の選句をし、多くの同士を募って初期の台湾俳壇における一大勢力を作った。

『相思樹』はホトトギス系の結社「竹風吟壇」の同人を主体として明治37年（1904）5月15日に発行された俳誌で、創刊号は菊版16頁の小冊子であった。しかし沈氏によれば、『相思樹』の史的意義は多大なものであるにも関わらず、それについての論説は、島田謹二の「正岡子規と渡辺香墨」、「続香墨論」、阿部誠文の「台湾俳壇史」（俳誌『燕巣』にて1999年より連載中）に言及があるのみである。『相思樹』創刊当初の主筆を務めた渡辺香墨は初期の台湾俳壇の基礎を作った一人であり、彼の台湾での文学活動は島田謹二の上述の論文で詳細に論述されている。また阿部誠文の「台湾俳壇史」は『ホトトギス』に発表された台湾俳人の作品を取り上げ、句評を加えたものである。

『相思樹』の誌名の相思樹はその閑雅な姿から台湾では歩道の並木あるいは鑑賞として至る所に植栽され、南国的情趣の溢れる植物として台湾の俳人に愛されている。『相思樹』の選者だった香墨・鳴球・李坪の3人は『相思樹』を通して明治期台湾俳句界の基盤を作った先人である。また作品の面において台湾俳句には異文化の交流と融合が見られ、内地趣味ではなく台湾特有の季題趣味を研鑽しはじめたのも『相思樹』の俳人たちであり、その集大成が明治43年（1910）に出版された

李坪の『台湾歳時記』である。

『相思樹』編集者の服部烏亭の「寄空鳥《上》」によると、創刊の発起者は堀尾空鳥、田内芋作、加藤申衣、蝸居（本名不詳）、服部烏亭の五人である。その他竹風吟壇時代からの古参には、みの作、落水、稲城、天涯（法経堂）、李坪（本名小林里平）があり、『相思樹』発刊以降は山田不耳、藤井烏犍、庄司瓦全などが加わった。有力同人は上記の他に基隆の吉川五平太６や、金瓜石の渡辺風山堂などがいた。『相思樹』はその主筆と傾向により、前期（渡辺香墨主筆時代）と後期（岩田鳴球７主筆時代）に大別できる。

前期『相思樹』の主筆の渡辺香墨は小林李坪と共に当季雑詠の選者として発刊当初の『相思樹』を支えた。香墨は明治32年（1899）12月に台湾総督府法院検察官になり、翌年１月に台湾に赴任し、明治39年（1906）２月に離台するまで台湾で６年余りを過ごした。小林李坪は埼玉の出身で、本名は里平、李坪は本名に因んだ俳号である、明治33年頃渡台し、法院嘱託となり台湾固有の習俗を調査する「台湾慣習調査会」に所属し、また総督府管轄の台北地方法院の書記官も兼任していた。「南蛮会９」、「竹風吟壇」に参加し、明治40年（1907）に緑珊瑚会を創立し、明治末期まで俳壇をリードした。著書に『台湾年表』（伊能嘉矩との共著、琳瑯書屋、明治35年出版）、『台湾歳時記』（政教社、明治43年出版）などがある。二人は共に正岡子規の教えを受けた日本派の俳人であり、渡台後は多くの俳人を育て、初期の台湾俳壇の発展に大きく貢献した。

島田謹二は、『相思樹』同人が創刊初期において窓雨一派を主とする「日々俳壇」と正面衝突し、激烈な筆戦を交わしたと記している。

香墨は明治34年（1901）１月に台中、明治37年（1904）３月に台南に転勤し、その度に指導者として句会に臨み、地方句会の発展に尽力した。しかし地方句会の多くは香墨の指導により新風に目を向けるようになったものの、指導者を失ってからは再び旧派の勢力に支配されるようになった。香墨が台湾を離れ、李坪らが『相思樹』を抜けると、鳴球は実質的に主導権を握るようになった。後期の『相思樹』は投稿や投句の量において不振に陥り、存続が問題となった。その兆しは第５巻の改巻号からすでに見え始め、改巻号であるのに、全巻の約半分が主幹の鳴球の「琥珀帖」という７年前の日記で頁数を埋め合わせていた。『相思樹』の不振による廃刊の兆しが濃厚になってきた中で、有力メンバーで且つ『相思樹』の経済的後援者の一人でもある実業家の吉川五平太が「相思樹改善案」と題する一通の手紙を鳴球に寄越した。これは台湾最初の俳誌である『相思樹』の衰微を「非常の痛恨事」と感じた同人吉川五平太が、何とかして『相思樹』を再生させようとした提案である。雑誌編集の難点は「主幹者の多忙なる境遇」「会員一同不熱心」「会計の困難」三点にあると分析し、それぞれ対応策が考え出された。「会員一同不熱心」は、おそらく『相思樹』の存続の危機にある一番の根底的な原因である。当時は新傾向俳句を標榜する緑珊瑚会が『台湾日日新報』を拠所にし、多くの俳人の支持を得ていた。緑珊瑚会勢力の勃興と対照的に『相思樹』はますます下降気味になっていったのである。「相思樹改善案」を進言した二年後の明治44年（1911）９月に、五平太は南部旅行中濁水渓架橋通過の際橋より墜落し、42歳の生涯を閉じた。大正５年（1916）８月刊行された五平太記念号が『相思樹』の終刊号となった。

一方明治40年時代に河東碧梧桐が提唱した新傾向俳句が全国を席巻する勢いを見せた中、台湾でも河東碧梧桐の来台を機に、李坪や空鳥らによって発起された緑珊瑚会が碧派の句会に転じ、碧梧桐の唱導する新傾向の俳句をめざして、固定した季題趣味から脱しようと模索し努力した。それに対して、『相思樹』同人は新傾向に興味を示し

つつも、ホトトギス系の俳誌を標榜し、旧派俳人を大量に受け入れた緑珊瑚会の「来る者拒まず」の方針を痛烈に批判した。中心人物の鳴球は、一面においてはその傲岸不遜な態度のため多くの俳人の反感を買ったが、三井物産会社の台湾支店長として在台10年、台南、彰化、台中など中南部に住居を構える度に当地の句会を指導し、地方俳壇の発展に尽力した功績もある。

後期『相思樹』時代は作句の面において、樵山が編集を勤めた時期に雑詠・課題詠のほかに、「一題百句吟」や「互評俳句」などの募集も試みられた。一題百吟は一つの題に対して百句を出句することであるが、選者が内地著名俳人の小沢碧童ということもあり、当時は少数の熱心者が作句していたが、その後は何の音沙汰もなくなった。互評俳句欄は「雁来紅」と言い、樵山企画の俳句コーナーとして比較的人気を博していたものの、第6巻に入ってから投稿者は激減した。後期『相思樹』は編者が度々変わり、発刊も不定期になっていたが、地方句会にはいくつか特筆すべき動きがあった。その中でも北部の基隆に在住の俳人を中心に開始された「台湾五句集」の集会と、中南部の俳人が主になって発起した「涼樹傘」句会が同人を引率する力となっていた。

「台湾五句集」は『相思樹』系俳人の吉川五平太、山本風雨楼（常之助）など基隆在住の俳人によって発起された集まりであり、ほかに緑珊瑚系の青甫などの有力俳人がいた。明治41年（1908）頃、当地に「二二吟壇」が結成された。この二二吟壇は緑珊瑚会の俳人が主体となり、明治43年（1910）２月号の『ホトトギス』にもこの句会の記録が載っている。風雨楼のような、竹風吟壇と緑珊瑚の仲直りを願う竹風吟壇の同人も参加していた。その二二吟壇の記録が、翌月である明治四十三年二月号に載っている。そこには、今までのメンバーは一人も参加せず、台湾俳壇で初めてみえる青甫と風雨楼の名がみえるだけである。『緑珊瑚』に二二吟壇の句会報を書いたのは「青甫」であることから、彼が句会の中心人物であることが分かり、他に露村、八洲、硯水、周陽などがいる。風雨楼は明治42年（1909）12月には既に逝去しており、明治43年（1910）１月号の『ホトトギス』句会報に見える台湾五句集が台湾五句集最後の記録となったのは、風雨楼の死により台湾五句集が解散もしくは中止になったからと見て良かろう。

各地の俳人が活発に投稿したこの句会の詠句は『相思樹』に多く掲載され、投句者の作句力の高さが目を引く。上記２人の他に、貫城、北攝、迂骨、迂世丸、鐘堂、宙洋、八面峰、鎮西郎、塩村、霞堤、烏亭、枕流、芋作なども熱心に投句していた。「台湾五句集」で選出された句は『ホトトギス』にも紹介され、明治後期の台湾におけるホトトギス派の勢力を示す存在となった。

阿部誠文の「台湾俳壇史」は、２回連続で『ホトトギス』に採録された「台湾五句集」に触れ、迂世丸の「獄曳の出て行く跡に泣く子かな」と貫城の「舞猿や蜜柑をかくす陣羽織」二句を紹介した。『ホトトギス』42年３月号の最初の記録は、「台湾五句集」第６回の集会で詠まれた作品であり、題は「猿引」で出句者21名、選者18名である。沈氏は文献資料を調べて、こまごまと明治時代の台湾俳壇の実情を記述している。

大正時代の台湾俳壇は、諏訪素濤を中心とした河東碧梧桐系の「新傾向」俳句が一世を風靡しており、『熱』や『麗島』といった雑誌が発刊されていた。しかし、大正９年には『うしほ』が、翌大正10年には、『ゆうかり』が創刊され、「ホトトギス」派が全盛を迎える昭和初期の台湾俳壇を準備した。昭和初期の台湾俳壇は、「ホトトギス」派である、山本孕江の主宰する「ゆうかり」派全盛の時代であった。

台湾で俳句結社雑誌を出して名を残したのは日本人山本孕江の『ゆうかり』でそのほかに最近諏訪素濤の『熱吟社』が注目されている（阮文雅、

沈美雪、楊雅恵、周華斌)。少し日本本国と違うのは台湾で俳句を詠む方の多くは同時に短歌や川柳も詠むことであり、戦前戦後を通じて同様であると。

2.『ゆうかり』:ホトトギス派

『ゆうかり』は昭和の台湾俳壇を代表する俳誌でまた最も長く続いた(大正 10. 12〜昭和 20. 4)、主宰は山本孕江。俳句結社「ゆうかり」の前身は、大正 7 年 1 月に幸田青緑によって創設された「魁吟社」であった。その翌年の大正 8 年春、綾部王春を中心に「魁吟社」の会員が独立して「ホトトギス」系の「南吟社」を結成した。会員には三上孤羊(後の惜字塔)や大久保黙山があり、高雄の「哨船頭吟社」の互選回覧紙に倣って回覧紙『南』を作り回覧したが、大正 10 年 5 月に「哨船頭吟社」の山本孕江が、高雄税関から台北の中央研究院に転勤したのを機に、「ゆうかり」社が結成され、孕江を編集者として俳誌『ゆうかり』が創刊されることとなる。同年 12 月には山本岬人が入会し、会はますます盛んになって行った。当初の雑詠選者は前年渡台した「ホトトギス」の佐藤夜半であった。大正 12 年 9 月からは、東京の渡辺水巴が雑詠選者となったが、水巴は選が遅れがちであったため、同年 11 月以降は村上鬼城が雑詠選者となる。その後、「ゆうかり」社創立 10 周年にあたる、昭和 6 年 10 月からは、孕江が雑詠選者となり、昭和 4 年 5 月からは、阿波野青畝が「ゆうかり句帖」の選者を務めた。

山本孕江(1893〜1947)は、高知県生まれ。本名は昇。台湾におけるホトトギス派の中心人物である。編著に『ゆうかり俳句集』(昭和 10 年 10 月ゆうかり社)。句集『山本孕江句集』(昭和 17 年 11 月同句集刊行会)がある。

主な参考文献

1)沈美雪:『相思樹』小考―台湾最初の俳誌をめぐって―(日本台湾学会報第十一号(2009.5)(全 14 ページ)日本台湾学会報第十一号(2009.5)(日本語)

2)阮文雅:異国人の日本語文学――台北俳句会の一考察;植民地文化学会　2008 年 7 月 13 日(日本語)

3)蘇世邦:台湾俳句の季題について―「椰子」の句を例として(南台科技大學/應用日語系/97/碩士/097STUT0079004)2009(全 141 ページ)(華語)

4)沈美雪:「漢字文化圏における俳句受容の現状と問題点―台湾俳壇の歴史を中心に―」 2006 年 6 月 3 日(『日本台湾学会第八回学術大会報告者論文集』所収)(日本語)

5)沈美雪:「明治期の台湾俳壇について――俳句受容の始まり――」
『2007 年度日本語文・日語教育国際学術研討会会議手冊』2007 年 12 月銘傳大学応用日語学系・台湾日本語文学会・台湾日語教育学会所収。(日本語)

6)沈美雪:「台湾に於ける俳句受容の始まり――俳句流入の十年間をめぐって」『明道日本語教育』第 2 期 2008 年 7 月所収。

7)磯田一雄:戦後台湾における日本語俳句の進展と日本の俳句結社
―『七彩』・『春燈』・『燕巣』とのかかわりを中心に―東アジア研究(大阪経済法科大学アジア研究所)(日本語);第 57 号, 2012 年, 1-14 ページ(日本語)

呉昭新先生略歴

「2011 年 9 月第 6 回世界俳句協会大会で講演される呉昭新先生（於：明治大学）」

1930 年　生まれ
台湾彰化県出身

【学歴】
1957 年　国立台湾大学医学院医学部（七年制）卒業
1973 年　日本国立鹿児島大学医学部医学博士
　　台湾教育部審定教授

【職歴】
1957-1960 年　国立台湾大学医学院付属医院内科医師
1960-1965 年　馬偕医院内科主任医師
1965-1968 年　開業
1968-1971 年　台北鉄道医院内科主任
1971-1972 年　中山医学専科学校（現中山医学大学）内科主任教授兼付属医院院長
1972-1981 年　省立台北医院内科主任
1982-1986 年　省立台北医院院長
1986-1989 年　省立台南医院院長
1989-1992 年　衛生署予防医学研究所所長
1992-1993 年　衛生署検疫総所所長
1993 年 2 月　公務員を退官

【賞与】
1963 年　台湾医学会杜　聡明博士優秀論文賞受賞
1999 年　国家生技既医療保険委員会・全球展望医学基金会　特別医療貢献賞受賞
2012 年　日本短歌詩人協会　第七回国際短歌大会コンテスト　Certificate of Merit by Yasuhiro Kawamura 賞受賞

【現職】
執筆活動
・肝臓病
・健康診断
・台湾語書籍
Http://olddoc.tmu.edu.tw/chiaungo/whoru/c-v.htm

鹿港民俗文物館・中国信託商業銀行「文薈館」を訪ねて
～辜振甫氏・辜濂松氏を偲ぶ（後編）～

亜細亜大学アジア研究所嘱託研究員
根橋玲子

台湾の五大家族の一つである鹿港辜家は、辜顕栄氏がファミリービジネスの基盤を築き、辜振甫氏、辜濂松氏、辜啓允氏、辜成允兄弟などに伝承された。清朝から日本統治時代、国民党の長期政権や2000年前半の民進党政権時代を経て、時代の変化に合わせて、ビジネスを継承してきた。辜振甫氏が創業し、現在は台湾有数の大手銀行となった中国信託商業銀行は、その後一族の後継者辜濂松氏に引き継がれたが、2013年1月6日に執り行われた辜濂松氏の告別式からも、既に2年以上が経過している。

本稿の前編では、辜家の歴史を辿るべく、筆者が2015年4月及び9月に訪問した[1] 鹿港民俗文物館と中国信託商業銀行「文薈館」について、2005年2月故辜振甫氏告別式で配布された同氏追想録「勁寒梅香：辜振甫人生紀實」（辜振甫人生記録）を参考に記述した。

後編では、辜振甫氏追想録に加え、辜濂松氏の告別式で配布された「辜濂松先生追悼集」から一部記述を引用しながら、故辜振甫氏、故辜濂松氏の人生を辿り、辜家繁栄の遠因を探る。

1.「中國信託金融園区」と「生聲不息」

2014年12月2日、中国信託商業銀行本社ビルの南港への移転に伴い、中國信託金融園区CTBC Financial Park（住所：台北市南港區經貿二路168號1樓）がオープンした。8万坪もの土地を造成した「中國信託金融園区」は、同社前会長であった辜濂松氏が自ら土地を選定し、本社ビルを設計するなど、思い入れの深い事業であったという。とりわけ、同園区の入口には、多くの松が植林され「松の森」と呼ばれている。

写真1　「中國信託金融園区」全景
出所：中国信託商業銀行提供

「中國信託金融園区」には、中国信託商業銀行本社がある30階建オフィスビルのA棟のほか、20階建のB棟、14階建てのC棟の3棟の建物が造成されている。全体の建屋面積9,284坪を誇るこれら3棟のビルは、台湾の伝統的な「家」の精神を象徴する「山」の形に配置されている[2]。

同園区には、中国信託の関連企業のほか、ショッピングモールやレストランなどで勤務する約6,000名の従業員を収容しており、さらに4,827坪の公用スペースや3,641坪の公園緑地、その他8,500坪以上の広場を公共利用のために開放している。

中国信託商業銀行本社ビルであるA棟の1階ロビーには、中央に大型デジタル美術装置が配置されており、多くの訪問者の目を惹きつけている。「生聲不息」[3] と題したこの芸術作品は、前会長の

[1] 文薈館へは、開館直後の4月中旬に初めて訪問したが、再訪日の9月8日は図らずも辜濂松氏の誕生日であった。

[2] 2014年12月2日付卡優新聞網（http://www.cardu.com.tw）

故辜濂松氏が自ら策定した企業トレードマークである２つのＣが表現されている。台湾原生の動植物と現代デジタル芸術作品という取り合わせは、中国信託銀行の有する独特の企業観を反映しており、同行が有する企業精神と芸術的美学の統合を表している。この芸術的空間は中国信託本社ビルの訪問者に対し、台湾の土地に対する誇りや感動を呼び起こし､中国信託の企業理念である｢生聲不息｣を実感させている。

デジタル絵画と最先端技術素材が融合された、この 360 度室内デジタル美術装置は、山水画と台湾の原生動植物をモチーフとして、台湾の自然の美しさや四季の変化を映し出している。技術的な部分では、このデジタル美術装置は自然界に起きる変化を即時にデジタル演算することで、描かれる線や色、形や構図などが自然界の現象や動植物に近い動きをするようにプログラミングされている。

このデジタル芸術装置からは、四季折々の変化を反映しながら、鮮やかな色彩と繊細な姿で独特の美しさを有する台湾特有の原生動植物の姿が次々と表現されている。ロビーの左側壁面に描かれた台湾原生のクロマツを背景に、壁面をつたって５階の高さから地面に向かって、青い光を放った滝の水が落ちていく様子は、正に圧巻である。この「瀑布與松樹（滝と松)」という芸術作品は、故辜濂松氏が企業と国家の両方に貢献したことを表しているという。

「瀑布與松樹」の下にある中央の地面は、滝が流れ込む大きな池をイメージしているが、池のパネルに足を踏み入れると、水面に波紋が広がるという細かい仕掛けがある。このデジタルの池には、ニジマスやメダカ、タイワンキンギョやタナゴなど台湾原生の色とりどりの魚が自由に泳ぎ回っており、運が良ければ、トノサマガエルやタイワン

写真２：「瀑布與松樹(滝と松)」と題されたデジタル美術(左側壁面)
出所：中国信託商業銀行提供

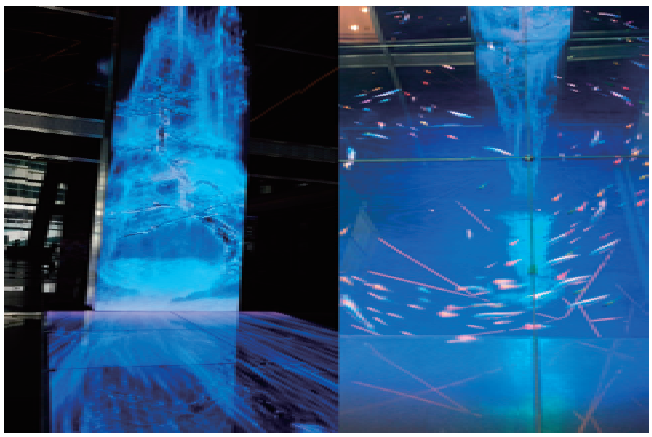


写真３：滝の手前の大きな池には魚が悠々と泳いでいる(中央地面)
出所：中国信託商業銀行提供

写真４：本社ロビーに広がる一面の花畑（右側地面）
出所：中国信託商業銀行提供

[3] 「生聲不息」とは、音が鳴り止まずよどみなく続く様子を表している。

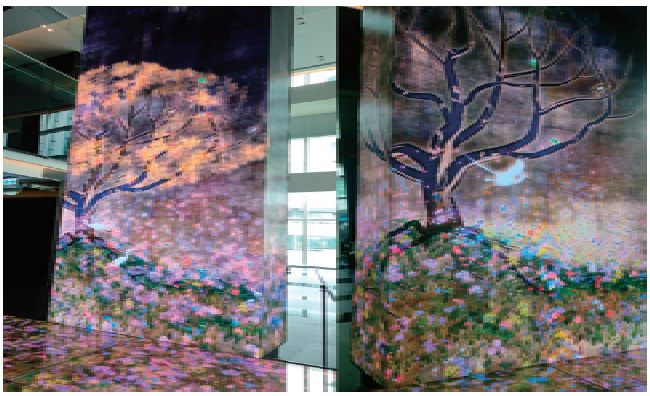


写真５：四季により色彩が変化し、時折鳥が飛び交う（右側壁面）
出所：中国信託商業銀行提供

サンショウウオ、台北樹蛙が出現する。

また､池の右側の地面には一面の花畑が広がり、マーガレット、セイヨウオトギリソウ、ニイタカセキチク、ニイタカシモツケ、ニイタカマンネングサオオバウマノスズクサ、タイワンヒヨドリバナやタカサゴユリなど、台湾原生の花や植物が咲き乱れている。トンボや紫斑蝶、フトオアゲハなどがこれらの花々の間を飛び回っている。

さらに､右側壁面には桜の木をモチーフにして、ピンクやオレンジ、赤などの花々が描かれ、ヤイロチョウ、キンバネホイビイ、タイワンシジュウカラ、ニイタカキクイタダキ、ツバメなど色鮮やかな台湾原生の鳥が飛び交っている様子が見られる。季節により様相を変えるこの草地や花々には、持続可能な社会への配慮等、中国信託の社会貢献の理念が反映されているという。

この美術装置は芸術的価値も非常に高いが、特筆すべき点として、世界で初めてのデータ連動型システム「Data Link」[4] が採用されており、世界や台湾のデータや中国信託の企業データの数値が、出現する動植物の数量に反映されるという画期的なシステムを有している。

例えば、世界の人口数が滝の水量に反映され、台北の気温により鳥が飛ぶ軌跡の色が変化する。また中国信託社員数が松の葉の数に連動しており、このオフィスビルで働く人数が樹木の葉の数に連動している。中国信託が支援した子供の数が草の数に反映され、社員のボランティア参加数が蝶の数に連動、同社が寄付を１万元行う毎に新しい花が一つ咲く。中国信託グループ企業数がマツボックリの数に反映され、中国信託のクレジットカード発行数が魚の数に連動している。中国信託の株価が上がるとトノサマガエルの数が増加し、株価が最高値をつけるとサンショウウオが発生する。

さらに、天井部分のデジタルパネルには、青い空に雲が浮かぶ様子が表されているが、オフィスビルが太陽光発電を行う発電量が、この雲の大きさと速度に連動しているという。

２．中國信託商業銀行・文薈館

中国信託商業銀行本社ビル１階ロビーの奥に「文薈館」がある。入り口には同行創業者の辜振甫氏の胸像と辜振甫氏と辜濂松氏の若き日の写真が展示されている。入口から直進してすぐに広がる明るいフロアには、中國信託商業銀行発展の歴史や沿革などが年代ごとにパネル展示されており、当時の様子がしのばれる多数の貴重な資料が掲示されている。

文薈館の展示パネルによれば、中国信託は、

写真６：中国信託発展の歴史と沿革
出所：筆者撮影

[4] 「Data Link」の詳細については、中国信託銀行の運営する「生聲不息」ウェブサイト（https://www.ctbc-lobbyart.com/）を参照のこと。

1966年に中華証券投資公司として設立され、当時台北の繁華街の台北市館前路59号にあった安産物ビル5階120坪のオフィスから19名の社員でスタートしたという。1971年5月31日に中国信託投資公司と社名変更、同年7月9日に対外経営信託会社業務を開始した。同年10月に青島西路の自社ビルを購入し、翌月11日に事務所を移転したが、当時の職員数は98名であった。1978年には中国信託は着実に成長し、社員数は300名となり、信託資金は100億台湾元を突破した。社員が多くなったため、重慶南路一段の重慶ビルに本社を移したが、これが現在の城中支店となっている。

1980年代には台北市の発展と共に忠孝東路から東に向かって都市が急速に発展していた。中国信託は、1984年には社員が661名に達し、信託資金は400億台湾元規模となった。辜濂松元会長は、台北市東区地域が新興商業センターに生まれ変わっていくことを予想し、松壽路に信義ビルを建設、1996年に信義区に銀行では初めて同地に本社を移転し、信義地域の発展に貢献した。

2002年には、中国信託は金融ホールディングカンパニーに生まれ変わった。今度は、南港地域とグループ企業の永続的な発展のために、南港に9000坪の土地を購入、2014年に同地に本社ビルを移転した。

文薈館には、中国信託本社ビルの移転時期と当時の建物が模型で再現されている。さらに年代毎に、当時の一人当たりGDP額や経済成長率、消費者物価指数のマクロデータと共に、同社の資産総額、貸出金残高、営業収入額、クレジットカード発行数などの中国信託の成長の推移がパネルで表示されている。また、奥にあるミニシアターでは、スクリーン前に10台のスクーターが設置され、前方スクリーンを見ながら、スクーターに乗った状態で、当時の街並みが体感できるようになっている。

また同行は1974年に台湾で初めてクレジットカードを発行した銀行であり、1989年には台湾初VISA提携クレジットカードを発行、2000年には台湾初のVISA提携ゴールドカード発行を行い、台湾での個人金融市場拡大に大きく貢献した。

また、文薈館の入り口から右手側の部屋は、前会長である辜濂松氏の功績を称えた「辜濂松紀念區」となっている。辜濂松紀念區のパネルの裏側に設置された3D映像装置からは、在りし日の辜濂松氏の姿が映し出されている。

写真7：信義本社時代のビル模型
出所：筆者撮影

写真8：中国信託の歴史が分かるミニシアター
出所：中国信託商業銀行提供

写真9：「辜濂松紀念區」
出所：筆者撮影

写真 10：旺年の辜濂松氏と再会できる貴重な場所
出所：筆者撮影

写真 11：辜濂松氏が政府から授与された勲章も展示されている
出所：筆者撮影

3D 装置からは辜濂松氏の映像に合わせて、ご自身の肉声も再現されている。見るものに語りかけるような辜氏の立ち姿や趣味であったピアノの弾き語りなど、生前接点のあった方々には特に、往年の辜氏と出会える大変貴重な場所となっている。

その他、中国信託商業銀行信義区本社時代の辜氏の董事長室の模型のほか、台湾外交部から授与された「一等外交奨章」、日本政府から授与された「旭日重光章」等勲章や賞状、身に着けていたスーツや小物、文房具など辜氏の遺品や、ニューヨーク大学 MBA の修了証書や台湾総統（当時李登輝

写真 12：中国信託信義本社時代の辜氏の董事長室の模型
出所：筆者撮影

氏）からの特任大使任命書等の文書・資料、さらに中国信託の信義本社時代に辜氏が過ごした董事長室の再現模型など、辜氏の生前の功績が偲ばれる貴重な品々が多数展示されている。

～最後に～

辜振甫氏は、その豊富な日本人脈と日本語の高い能力と知性により、台湾工商協進会理事長等を務めるなど、日台経済交流の礎を築いた。文字通り日本と台湾の架け橋となり、日台断交前の 1971 年に勲一等瑞宝章・藍綬褒章を日本政府から叙勲を受けている。他方、同氏は中国の経済文化に関する高い教養をかわれ、1982 年蒋経国政権の中国国民党中央常務委員となり、1991 年には海峡交流基金会の初代理事長に就任するなど、実質的な対中交渉のトップとなった。当時の台湾では戒厳令が解除されておらず、両岸は依然として緊張していた。1993 年 4 月の「辜汪会談[5]」、1998 年 10 月の「辜汪面談[6]」にて、辜振甫氏の名声が中国大

[5] 1993 年に中国海峡両岸関係協会汪道涵会長とシンガポールで初のトップ会談を実現。当初辜汪会談では、双方の幕僚は立場が異なり、共通認識を構築することは難しいとの見方があった。辜氏は汪氏と二人だけの機会を利用して相互の歩みよりを提案したという。常に相手の状況を第一に考慮した辜振甫氏は、当時、余人を以て代えがたいと評された。

[6] 1998 年に上海で汪会長と再び会談、北京で江沢民中国共産党総書記とも対面した。

陸でも広がったという。さらに、李登輝政権では総統府資政を務め、APEC 等国際会議にも参加するなど、台湾の国際外交のキーマンとなった。

辜振甫氏他界後、一族の後継者として数多くの功績を残した辜濂松氏はニューヨーク大学 MBA 取得後、その豊富な人脈を生かし、中国信託の投資信託業務の拡大に尽力した。辜氏は、世界の金融関係者から Jeferey Koo（ジェフリー・クー）と呼ばれ、アジアの主要な銀行オーナーとして尊敬されており、2000 年以降は APEC の使節団長を務めるなど公務にも邁進した。また、辜振甫氏が遺した日台貿易経済交流団体である台日商務協議会（現台日商務交流協進会）会長として、日本と台湾の貿易経済交流に大きな貢献を行い、2012 年春の外国人叙勲により、日本政府から旭日重光章を授章している。栄誉ある叙勲を受けたまさに同じ年の 2012 年 12 月 6 日、辜氏は愛して止まないニューヨークの地で、惜しまれながら 79 歳の生涯を終えた。

「文薈館」で上映される辜濂松氏 3D 映像フィルムにて、最後に辜氏が語るメッセージには感動を禁じ得ない。このメッセージは、前出「辜濂松先生追悼集」冒頭の辜氏の挨拶文から引用されている文章であるが、何故辜家が、五大家族の中で最も継続的に事業を拡大し繁栄したのか、理解する一つの手掛かりとなるだろう。

「一人一人が自分の能力の範囲内でできる限りの努力をし、そして実行方法を練り、具体的に事を行うこと。決して良心に恥じることはしない。これができれば、その人は家庭の中で、父母の良い息子であり、奥さんの良い夫であり、子供たちの良い父親だ。家庭は非常に円満で愉快だ。私はこれこそ「成功」だと思う。」

中国信託商業銀行のホールディングカンパニーである中国信託金融控股（CTBC）は、2014 年 6 月 5 日に東京スター銀行を M&A で株式取得を行った。CTBC のグループ企業となった東京スター銀行の会長には、CTBC 江丙坤最高顧問が就任した。江丙坤氏の会長就任記念の祝賀会が、同年 10 月 20 日夜ホテルオークラにて開催され、日華議員懇談会平沼赳夫会長、台北駐日経済文化代表処沈斯淳代表、交流協会大橋光夫会長が挨拶を行った。

当日江会長は次のようなスピーチを行った。「日本と縁が深い辜振甫先生、辜濂松先生にとって、日本での拠点設立は長年の夢でございました。特に、辜濂松元会長が日本で CTBC が基盤を確立することは悲願であり、その意思を継いで、東京スター銀行の会長就任を果たせたことを非常に光栄に思っております。」その後、故辜濂松夫人の辜林瑞慧氏も壇上に上がり、東京スター銀行代表執行役頭取入江優氏と 3 人で固い握手をした。

辜振甫氏、辜濂松氏は他界してなお、日台交流の礎を担うキーパーソンであり続けている。

（参考資料）

黄天才、黄肇行（2005）「勁寒梅香：辜振甫人生紀實」聯經出版公司発行

「辜濂松先生追悼集」（2013）中国信託商業銀行発行

＊本稿は、黄天才、黄肇行（2005）「勁寒梅香：辜振甫人生紀實」（聯經出版公司発行）及び「辜濂松先生追悼集」（2012）の記述内容に加え、中国信託商業銀行董事長室へのヒアリング内容を基に執筆を行った。本原稿執筆に当たっては、中国信託金融ホールディング江丙坤最高顧問、黄章富副総経理及び中華経済研究院顧問の辜晏宏氏に多大なご協力とご知見をお借りした。また今回の調査にご同行頂いた、台中東海大学劉仁傑教授、新潟大学経済学部岸保行准教授、法政大学グローバル教養学部福岡賢昌准教授及び、我々の調査事業に対して共同研究助成を頂いた公益財団法人交流協会に心より感謝を申し上げたい。

台北の歴史を歩く　その 28（最終回）

訪ねてみたい台北市内の歴史再生空間

片倉　佳史

本連載最終回となる今回は台北市内の歴史再生空間を紹介したい。台北では老建築のリノベーションと再利用が盛んに行なわれており、一種の潮流として注目されている。こういった再生空間はカフェやレストラン、ギャラリーなどになっている。いずれも気軽に入ることができるので、古きよき時代の香りを感じ取ってみよう。

青田七六～大学教員住宅を生かしたカフェ

まずは台北市の南部、国立台湾大学（旧台北帝国大学）に近い青田街のリノベーション物件を紹介したい。この一帯には戦前の日本家屋が今も数多く残っており、独特の雰囲気をまとったエリアである。日本統治時代後期に整備され、旧台北帝国大学や旧制台北高等学校の教職員住宅が建てられていた場所である。そして、隣接して司法関係者や税関職員などの官舎が集まっていた。

この一帯は台北市の中でも比較的後発の開発エリアで、昭和期に入ってから整備されたことにちなんで「昭和町」と呼ばれた。家屋はいずれも広い庭を擁しており、鬱蒼と生い茂った南国の植物が独特な雰囲気を醸し出している。その中にひっそりと木造家屋が建っている。

青田七六もそういった建物の一つである。ここは台北帝大で教鞭をとり、微生物学の権威として知られた足立仁教授の邸宅をリノベーションしている。足立教授は北海道帝国大学を卒業後、1926（大正 15）年 5 月 3 日付けで台湾総督府高等農林学校教授として台湾に渡った。その後、すぐに欧米視察に出かけ、1929（昭和 4 ）年 3 月 23 日付けで台北帝大農学部の教授となっている。専門は応用微生物学で、土壌微生物に関する研究で特に製糖事業の発展に大きく寄与した。

家屋の竣工は 1931（昭和 6 ）年とされる。敷地面積が 206 坪と広く、ゆったりとした配置となっている。中央に母屋があり、四方が緑に包まれている。当時から現在のように繁茂する緑を想定していたかどうかは不明だが、豊かな住環境を意識していたことに疑いはない。

建物は和洋折衷のスタイルで、洋間と和室で構成されている。日本統治時代初期に各地で設けられた官舎は純和風であることが多かったが、大正期以降は和洋折衷のスタイルが増えていった。ここもそういった流れの中にあり、居間や食堂、書斎は洋間となっている。通気と採光にも配慮がなされ、屋内のどこにいても薄暗さや湿気を感じることはない。

家屋の南側には長い廊下が設けられている。ここは「縁側」となっており、適度に色あせた木板が印象的だ。現在は痕跡を残していないが、庭にはプールもあったという。その跡地は客席が設けられ、南国の日差しを浴びながら、くつろぐことができる。

戦後を迎え、日本人が台湾を離れた後は、この建物は国立台湾大学の管轄下に移る。所有者も足立教授に代わって、地質学の権威である馬廷英教授が主となった。そして、馬教授が他界した後も遺族はここに住み続け、建物を守ってきた。筆者はご縁をいただいて、2000 年に初めてここを取材したが、その時も、庭の手入れなどがしっかりと行き届き、住人の人柄が伝わってきたことを覚えている。

青田七六は台北を代表するリノベーション物件。毎月第一月曜日が定休日となっている。営業時間は 11 時半から 21 時まで。台北青田街 7 巷 6 号（02-2391-6676）。

ここ数年、老家屋の保存運動が熱心に進められ、日本家屋の趣きを保ちつつ、カフェなどとして再生させる動きが起こっている。

現在、この家屋は黄金種子文化事業有限公司という企業によって運営されている。リノベーションの上、カフェ・レストランとして生まれ変わり、人気を博している。修復については古建築再生というコンセプトの下、あくまでも原型に忠実であることにこだわったという。戦後に改造された部分や新しく取り付けられたものは本来の姿に戻すために取り払われ、窓ガラスなど、残せるものはできるかぎりそのまま用いたという。さらに、雨漏りや地震などにも対処するべく、補強工事が行なわれ、1 年の歳月を費やしている。

青田七六がオープンしたのは 2011 年 6 月 22 日。現在は食事のみならず、オリジナルの点心類やデザートのほか、足立教授が心血を注いだ製糖事業の研究にちなみ、さとうきびを用いたオリジナルドリンクなどもある。日によっては席がなくなってしまうことがあるので、大人数で訪問する際には電話予約を事前にしておきたいところである。

台北松山文創園區～台北最大の公共空間

次に紹介したいのは日本統治時代の産業施設を総合文化空間として整備したスポットである。ここは台北を代表する公共空間として知られ、諸外国からも多くの行楽客が訪れている。ガイドブックなどでは必ず紹介されているスポットである。

台北は日本統治時代から台湾最大の人口を誇る都市として君臨していたが、盆地に位置しているために、市街地の面積は小さく、発展には限界があった。そのため、工場や産業施設は郊外に設けられる傾向があった。

特に規模の大きな工場などは輸送の利便性の高さから縦貫鉄道に沿って設けられることが多かった。ここはその中でも最大規模を誇った施設である。現在はその広大な敷地を利用し、公共空間が整備されている。

この工場が設けられたのは 1937（昭和 12）年のことだった。台湾総督府専売局は当時は空き地が広がっていたというこの場所にタバコ工場を開設することを決めた。鉄道線路からも近く、かつては車窓にこの工場が見えたというが、現在、線路はすべて地下化され、その跡地には市民大道という道路が新設された。なお、その北側にはかつての鉄道工場が残っている。こちらも現在は郊外に移転し、その跡地の有効利用が討論されている。

終戦を迎え、台湾総督府が所有していた建造物や公共建築はすべて中華民国国民党政府に接収された。ここもその例に漏れず、1949 年に「台湾菸酒公賣局松山菸廠」と改名された。当時はアジア有数の規模を誇り、最盛期には 2000 人近くの工員が働いていたという。台北市内ではもちろん、台湾全体でも有数の規模を誇る工場として君臨し

た。

しかし、高度成長期を迎え、経済規模が拡大していくと、こういった産業施設はより大きな敷地を求めて郊外に移転することが増え、役目を終えることが多くなかった。また、施設の老朽化や再開発によって消え去ったところも少なくない。ここの場合、1988年に工場機能が移転し、その後は長らく廃棄されていた。

公共空間として生まれ変わったたばこ工場

台湾では1990年代後半から民主化が急速に進められ、台湾本土意識が高揚すると同時に、歴史建築の保存や修復などが盛んになった。日本統治時代の産業施設や建造物も行政による保存対象となることが増え、2000年頃からはその勢いが加速化した。

この工場も2001年に産業遺産として保存対象となった。そして、カルチャースポットとして整備されることが決まった。空間の有効利用が考慮され、さまざまな意図が盛り込まれたが、修復工事にはそれなりの時間がかかり、オープンは2010年まで待たなければならなかった。

現在、この空間は「松山文化創意園區」と名付けられている。敷地からは台北101が見え、信義新都心地区にも近い。園内は大きく繁茂した緑樹で埋め尽くされ、池ではアヒルや鯉が泳ぐ。広大な敷地は散策コースとしても人気がある。

敷地内には事務所や製造工場、機械修理工場、倉庫群が残っている。当時は工場施設以外にも工員宿舎や医務局、公共浴室、託児所などがあり、工場全体が一つの集落のようだったという。

事務所と工場は二階建ての鉄筋コンクリート造りで、両者は当時は珍しかったという階上を結ぶ渡り廊下で繋がっていた。窓枠や扉にはひのき材が用いられ、70年前の姿を留めている。長い廊下を歩いていると、窓の多さにも気づかされるだろう。これは日当たりを良くするほか、タバコ工場は湿度が高いので、通気性を考慮したものである。

修復については史跡の保存対象になっているため、大幅な改修は許されず、樹齢50年以上の樹木を刈ることも許されなかった。また、修復業者のこだわりも特筆するべきものがあり、使用ができなくなった素材はできるだけ同年代に製造された似た材質のものを探したり、工法についても往時のものを再現したりして、構造物の風格を保つ努力がなされたという。

現在、園内はアートやデザインに関するイベントが随時行なわれているほか、デザインモールの「誠品生活松菸店」ではグッズの販売や実演コーナーがある。レストランやカフェ、ギャラリーの

アートやデザインに関するイベントが行なわれ、週末には多くの人が訪れる。かつての倉庫も展示空間としてリニューアルされている。

中庭には噴水があり、女性の裸像が置かれている。これは当時の女性工員をモデルにしたものだという。開園時間は朝8時から22時となっている。台北市光復南路133号(02-2765-1388)。

「誠品生活松菸店」はメインとなる建物で、新築した高層ビルだが、館内には伝統工芸の展示や実演コーナーなどがある。宿泊施設もオープンしている。

工場建築群の設計は梅澤捨次郎が行なっている。梅澤は台南市の旧台南銀座の設計で知られており、昭和期に建築に深くかかわった技師である。写真は修復工事が施される前の様子。

かつての工場群は台湾設計館という名で整備されている。開館時間は９時半から 17:時半まで。月曜休館。

ほか、書店などもあり、週末などは多くの人で賑わう。さらに、宿泊施設もオープンし、こちらも大きく話題となった。

台湾の経済発展を支えた産業施設は新しい息吹を吹き込まれ、生まれ変わった。そういった空間で触れる台湾の最新カルチャーシーンを存分に楽しんでみたいところである。

華山 1914 文化創意園区

台北の東西を結ぶメインストリート。忠孝東路に面して、この建物がある。ここはかつての台湾総督府専売局台北第一工場で、大きな工場施設と煙突の存在で知られていた。

工場の歴史は古く 1910 年代に遡る。日本による台湾統治も安定期に入りつつあった時代で、人々の暮らしにもやや余裕が出てきた頃である。これを受け、この頃から酒類の消費量が急増したという。ただし、当時、酒造は専売局の管理下に置かれ、台湾にはいわゆる酒蔵というものはなかった。流通していたのは日本本土から持ち込まれたものだった。

1914（大正３）年、台湾で最初の製酒工場が設けられた。当時は酒やタバコ、塩、そしてアヘンなどが総督府の専売品とされており、重要な財源となっていたが、酒類は今後需要が伸びることが予測されていたこともあり、重要視されたようである。

構内にはかつての倉庫や作業場が残っている。これらの施設は終戦後、中華民国政府に接収され、名も台湾省菸酒公売局台北第一酒廠と改められた。長らく日本統治時代に設けられた設備が使用されていたが、1987 年に工場全体が台北郊外へと移転し、こちらは放置されるようになった。

現在、各施設は芸術展示空間として整備されている。ギャラリースペースや映画の上映スペース、また、コンサート会場としても使用できる空間もある。そして、一部は若き芸術家たちに創作空間と

して開放されている。また、倉庫を用いた個性派ピザハウス「Alleycat's」や創作台湾料理ビュッフェの「青葉新楽園」など、飲食店も入っている。いずれも工場建築の雰囲気を生かしたインテリアとなっており、独特の雰囲気が漂っている。

そのほか、かつては貯蔵庫だったという倉庫群や醸造工場、そして、高さ30メートルという大煙突などが残っており、これらは産業遺産として台北市が管理している。後方にはかつて貨物操車場だった土地が緑地となり、憩いの場として機能している。建築散策を楽しんだ後は南国の緑にたっぷり触れてみよう。

華山1914文化創意園区。広い敷地を誇る公共空間。八徳路と忠孝東路、金山南路の交差点に位置している。

一般に開放されたのは1998年からで、不定期ながら、作品の展示やパフォーマンスが実施されている。

倉庫を用いたピザハウスやカフェなどもある。外国人観光客の姿も頻繁に見かける。青葉新楽園。

樟脳の精製を行なっていた工場建築

こちらも台湾総督府専売局が管理していた土地であり、かつては樟脳の精製が行なわれていた。酒造工場に隣接し、こちらも市内屈指の規模を誇っていた。ここもまた、現在は文芸空間として整備されており、華山1914文化創意園区の一部となっている。

この工場群は文化創意園区の入口からはやや奥まった場所に位置している。赤煉瓦の大きな建物が繁茂した亜熱帯の樹木に囲まれ、その隙間から差しこんだ陽光に照らされている。この一角には全部で7棟の建物があり、すべてが赤煉瓦建築となっている。もともとは8棟あったというが、1棟はすでに取り壊されてしまい、その姿を留めていない。

どの建物も天井が高く、空間的な広がりが強調されている。また、赤煉瓦の壁面ばかりに目がいってしまうが、屋根には日本式の黒瓦をいだいていることにも注目したいところである。

この樟脳工場群は1918（大正7）年から整備が進められた。まず、実際に樟脳の精製が行なわれていたというE棟（西5館）は大正7年竣工で、この一角で最も古い建物とされている。また、同年竣工のA棟（西1館）も樟脳工場だったが、こちらは建坪が205坪と大きい。いずれも屋内に柱はなく、産業施設らしい整然とした雰囲気をまとっている。現在、ここはイベントスペースとなっており、600名から800名の収容が可能だという。

北平東路に面したB棟（西2館）と呼ばれる建物は1930（昭和5）年に竣工したもので、建坪は

94 坪、高さは 11,4 メートルとなっている。竣工時期がやや遅れているだけに建物の構造がより屈強な印象となっている。ここはギャラリースペースとなっており、各種企画展示が行なわれている。

一般公開されたのは 2012 年 10 月。現在、複数の店舗が入っており、散策やショッピングが楽しめる。デザインマーケットのようなものも随時行なわれている。

「好様思維・VVG Thinking」は優美な雰囲気を強調させたアート空間。一階はレストラン、二階はグッズショップとなっている。

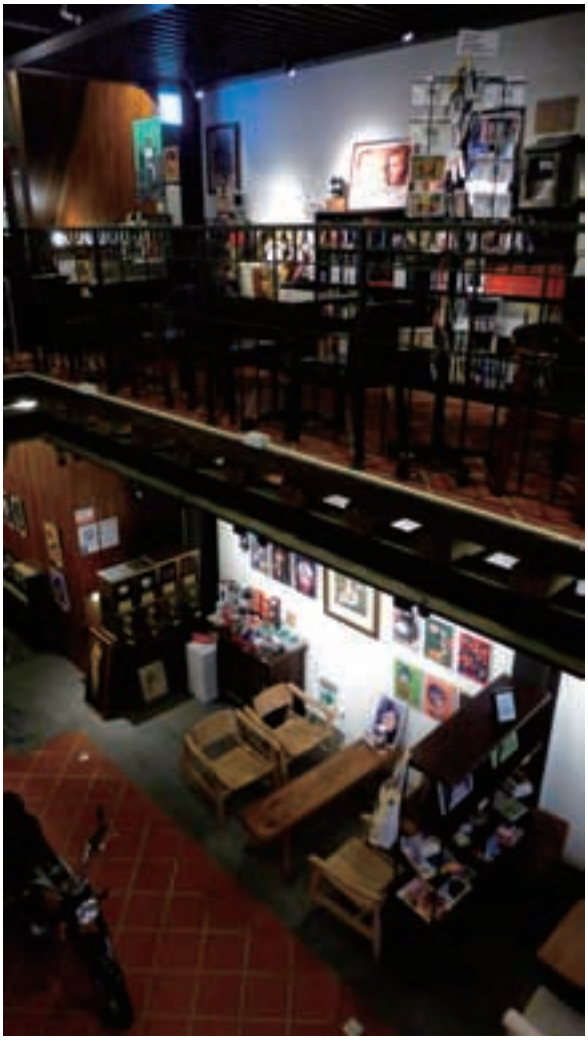
「好様思維・VVG Thinking」の二階には書店スペースもある。

なお、現在は緑地となっている広場はかつての貨物操車場である。樟脳は日本統治時代の専売品の一つだったが、戦後は施設が中華民国によって接収され、国民党政府が管理する資産となった。

カフェとして再生された老建築たち

昨今の台湾では老建築・老家屋をリノベーションし、カフェやレストランとして再生させる事業が盛んだ。本連載でもこういった物件をいくつか紹介してきたが、いずれも歴史の趣きを後世に伝えるべく、さまざまな努力がなされている。

ここではその中からいくつかを取り上げてみたい。



「保安捌肆 Boan 84」。大胆な吹き抜け構造となっている。一階にはカフェとなっており、こだわりのコーヒーを楽しむことができる。個展なども随時開かれている。

保安捌肆 Boan 84

まずは保安街と延平北路の交差点近くにある「保安捌肆 Boan 84」。この建物は1920年代に建てられたもので、すっきりとした外観ではあるが、表面に据え付けられた擬似列柱がアクセントとなり、凝った意匠となっている。

ここは長らく外科医院として使用されていた。建物は1921（大正10）年に登記がなされている。当時の住所表記は台北市太平町86番地。この住所をたどっていくと、昭和10年の時点では1階は古川栄次郎という人物が飲食店を経営していたことがわかる。その後、昭和15年に梁術正という人物が建物を借り受け、松田商店という雑貨店を開いた。

終戦後は倉庫として使用されていたと推測されるが、1948年2月18日に意思の謝唐山氏がこの建物を購入。翌年から外科医院として使用されるようになった。もともとは木造家屋だったというが、後にコンクリートで補強工事を受け、現在の姿となった。医院として使用されたのは1階のみで、2階と3階は住居空間となっていたという。

正面には「順天外科醫院」という文字が誇らしげに残されている。現在は保安街と呼ばれているこの路地は、かつて診療所や薬局がいくつか並んでいたという。日本統治時代は台北でも指折りの人口密度を誇り、活況を呈していたが、その後は没落し、現在にいたる。

現在、この建物は歴史建築の再生事例として注目を集めている。2009年4月30日には台北市から古蹟としての指定を受けた。修復には7年の歳月を要したが、2013年3月に「再生空間」として生まれ変わった。

1階はカフェとなっており、入口の奥は大胆な吹き抜け構造となっている。店は「保安捌肆 Boan 84」と名付けられている。これは「保安街84号」という住所表記をそのまま用いたものである。2階は書斎のような雰囲気で、アンティーク家具などが置かれている。そして、3階は「観止堂」という名の多目的スペースになっている。やや急な階段をあがっていくと、舞台がある。不定期開催ではあるが、文化イベントなどが行なわれている。

二條通・緑島小夜曲

台北を代表する歓楽街となっている林森北路は一帯は終戦まで「大正町」と呼ばれ、日本人が暮らす高級住宅街だった。現在、町の風貌はすっかり変わっているが、路地の中には木造家屋が残り、散策が楽しい。

ここ「二條通・緑島小夜曲」は日本統治時代の木造家屋を用いた喫茶店である。大正末期に建てられたもので、当時の登記簿によると、佐々木八二郎という写真家が所有していたと記載がある。戦後は長らく警察関係の官舎として利用され、持ち主は幾度か変わったが、2009年になって現オーナーである建築家の鍾永男氏が買い取り、建築事務所として使用された。

現在、1階部分は喫茶店として整備されており、2階は鍾氏の事務所として利用されている。当初は建物の損傷がかなり激しかったというが、木造家屋の趣は現代の建築物にはない独自のものがあり、鍾氏はそういった部分をできるかぎり残したいと考えたという。元来の姿がいかなるものだっ

1階はカフェとして整備され、木造家屋の趣きに触れることができる。建物の由来については不明な部分が少なくない。

たのかを想像し、それに近づける努力が続けられた。鍾氏自身、台湾東部の花蓮市で木造家屋の修復に携わった経験があり、そういった知識がここにも活かされた。

現在は老建築を愛する人々が集うサロンのような存在で、常連客が多い。なお、店名に冠した「二條通」とは戦前の呼び方をならったもので、現在も通称として用いられている。

福州街・滴咖啡～旧尾辻國吉邸宅

ここは閑静な住宅街に残る官舎である。広い敷地を擁し、亜熱帯の植物が繁茂している。この一帯はかつて内地人（日本本土出身者とその子孫）が多く住んでいたため、日本式の家屋や戦前の建物は比較的多く見かけるが、木造二階建てというものは多くない。

この家屋の主は尾辻国吉という人物である。日本統治時代初期、台北市内の道路設計に功のあった人物で、台湾総督府民政長官の後藤新平の指示下、1910（明治43）年の市区改正を契機として造営された三線道路の設計担当者である。三線道路は旧台北城の城壁跡地を用い、約40メートルという道幅を誇った道路である。後藤は「パリのシャンゼリーゼ通りのように」と指示を出したと伝えられ、本来の実用性のみならず、都市としての美観を兼ね備えることも意識した道路だった。

これに従い、尾辻はドイツをモデルに植樹を施したと伝えられる。これは植物学者の田代安定の提案によるものだった。亜熱帯性の植物群が選ばれ、具体的には菩提樹、鳳凰木、南洋杉などが植えられた。尾辻はさらに、歩行者のための空間確保も重視していたと伝えられる。

尾辻は1907（明治40）年3月31日に台湾総督府に赴任し、官房営繕課に配属されている。その後、一度は台南方面に出向いたが、台北に戻った。1922（大正11）年7月には専売局技師となり、1931（昭和6）年11月31日には専売局営繕課長に就任している。

1930（昭和5）年に刊行された『台湾建築会誌』には尾辻邸全体の見取り図が掲載されている。これによれば、建物は台湾の気候を意識した造りになっており、風通しや除湿が考慮されていたという。一階には応接室や食堂、客間、炊事場などがあり、女中のための小部屋などもあった。また、二階には寝室と子供部屋が設けられていた。

日本統治時代の住所は台北市千歳町2丁目11番地。千歳町は児玉町や佐久間町と並び、内地人が数多く暮らした地区だった。邸宅前の道路は現在、福州街と呼ばれているが、現在もわずかながら戦前に建てられた老家屋が残っている。

戦後、この建物は国立台湾師範大学の校長官舎になっていた。個人の邸宅だったこともあり、長らく内部の様子を知ることはできなかったが、高い塀越しに見える建物は独特な風格を漂わせており、郷土史研究家の間ではよく話題に上がる建物だった。

2011年6月25日、台北市はここを市定古蹟に指定し、保存を決定した。現在も管理者は国立台湾師範大学となっているが、歴史建築の有効利用を目指して修復工事が行なわれた。現在はカフェとして生まれ変わっており、市民に開放されている。全体的に往時の趣きが色濃く感じられるので、館内の見学は楽しい。歴史建築の雰囲気をたっぷりと楽しんでみよう。

館内は日本統治時代の官舎によく見られた和洋折衷のスタイル。板張りの応接間には往時の雰囲気が残っている。

玄関脇の部屋も往時の姿を保っている。亜熱帯の気候を考慮し、風通しと日当たりに配慮がなされた設計となっている。現住所は台北市中正区福州街 11 号。

市長官邸藝文沙龍―旧台北州知事公邸

ここは日本統治時代の台北州知事公邸だった建物である。当時の高級宿舎によく見られた和洋折衷の造りで、基本的な間取りは当時から洋風となっていた。家具などについても舶来物で統一されていたと言われている。

建物の竣工は 1935（昭和 10）年。建坪は 152 坪となっており、邸宅としては当時最大級の広さとなっていた。敷地内に植えられた植物は亜熱帯性のものだけが選ばれ、濃い緑が木造家屋のたたずまいを際立たせていたという。

戦後は台北市長官邸となっていたが、ここ数年の間は放置され、荒れ果てていたという。それを台北市が修復し、芸術サロンとして市民に開放したのは 2000 年 11 月のことだった。いわゆるリノベーション物件の中では早期に整備され、ここの成功が歴史建築を公共空間として市民に開放するという手法の先駆けとなった。そして、現在の潮流に繋がったとしても過言ではない。

館内の各部屋は多目的スペースとなっており、展示室のほか、講演や会議などにも利用されている。また、ベランダも併設されたカフェのテラス席となっている。そのほか、詩集や画集、文芸作品などの販売コーナーもある。散策の途中に立ち寄ってみたい休憩スポットである。

なお、今回で本連載は終了となる。全 28 回にわたって紹介してきた台北の歴史だが、今も台湾は激変のさなかにあり、台北という都市の風景も刻一刻と変化を見せている。読者諸氏においては長期にわたる連載におつきあいいただき、心からお礼を申し上げたい。次回からは「台湾の歴史を歩く」と題し、台湾各地・各都市の歴史について、日本との歴史的絡みに触れつつ、その歩みをたどっていきたいと思う。

外観は和風建築の趣を保っており、今や数少なくなった木造建築として、台北市が指定する古蹟となっている。戦後は台北市長公邸として使用されていた。現住所は中正区徐州路 46 号。

片倉佳史　（かたくら よしふみ）1969 年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは 30 冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けており、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も頻繁に行なっている。著書に『台湾に生きている日本』、台北生活情報誌『悠遊台湾』、『台湾 鉄道の旅』、『台湾に残る日本鉄道遺産』など。最新刊は『古写真が語る 台湾 日本統治時代の 50 年』（祥伝社）。ウェブサイト台湾特捜百貨店　http://katakura.net/

ワクワク・ドキドキ・感動は すべての人に与えられた権利である

心魂総合プロデューサー　寺田　真実

「交流協会では、日台交流に有意義な催しに後援助成・名義を付与する形で協力しています。ここでは、難病の為に長期入院をしている子供達とその親御さんに、生きる喜び・楽しさを届けるため、病院等でのミュージカル・パフォーマンスを続けている心魂プロジェクトの、台湾の病院での活動をご紹介致します。」

劇団四季出身俳優・宝塚歌劇団出身俳優を中心に様々なジャンルのアーティストがタッグを組んで主に難病のこども達・ご家族にオリジナルミュージカルやソング＆ダンス、和太鼓での夏祭り等のパフォーマンスをデリバリーする活動団体・NPO法人心魂（こころだま）プロジェクト。
私達は中々プロの舞台に触れられない人にこそ生身のアーティストが放つパワーをデリバリーしたいと願い2014年1月に活動を開始致しました。

皆様初めまして。心魂プロジェクト総合プロデューサーの寺田真実（てらだまさみ）です。
私達は先日台湾の病院で病気と戦っているこども達、ご両親、病院スタッフにフラッシュモブスタイルのソング＆ダンスをデリバリーして参りました。
台北・淡水・新竹・台東にあります Mackey Memorial Hospital 様の病棟、ロビー、礼拝堂、老人ホームで合計10回公演。
そしてこの活動を今後台湾で継続的に行って行く為に上演致しました台北・高雄・台中日本人学校様での合計4公演。
高雄日本人会様に後援を頂きまして高雄市・台南市では一般公演を2回、合計19日間16回公演（8月27日～9月13日）のツアーでした。

台湾ツアーメンバー

有永美奈子	心魂代表理事　宝塚歌劇団・劇団四季出身俳優
岩瀬　貴浩	心魂音楽監督　作曲家・編曲家
岩本　潤子	劇団四季出身俳優
大塚　　俊	劇団四季出身俳優
齊藤　志穂	心魂東北担当　ジャパンアクションクラブ出身武術家
武田　桃子	心魂アートディレクター　ミュージカル女優
千代園　剛	和太鼓奏者
寺田　真実	心魂総合プロデューサー　劇団四季出身俳優

（以上8名）

今回の心魂プロジェクト台湾ツアーは『公益財団法人　交流協会』様より御協賛を頂きました。企画開始当時、活動を立ち上げて一年半の私達が三週間近い台湾ツアーを組むことが出来ましたのは、交流協会様の御協賛と言うことで信用を得た部分がとても大きかったです。この場をお借りし改めまして感謝申し上げます。
私達の活動に大きな羽を与えて下さり本当にありがとうございました。ゼロが一になり、一が百となるような活動をさせて頂きました。今後ともど

1．馬偕記念病院・新竹院区、小児病棟内での公演フラッシュモブの一部。女医が突然踊り出しパフォーマンスに加わる瞬間。

うぞ宜しくお願い致します。

台湾ツアーの活動報告を始める前に私達がどんな想いでこの活動を始めたのかお話しさせて下さい。その想いがやがて台湾まで翼を広げることになりました経緯を…。

【こどもの笑顔はお母さんの笑顔を生む】
【お母さんの笑顔はこどもの笑顔を生む】
皆さんはきっと当たり前の事だとお思いでしょうね。ですが難病のこども達の家庭では簡単な事では有りません。日々の大変な生活に追われてお母さんだけでなくお父さんも兄弟姉妹も家族皆が【笑顔】と言う表現から離れて行ってしまいます。
私達は活動を開始して22ヶ月間、多くの尊い命と出会って来ました。素晴らしい家族と出会って来ました。家族で手を合わせて壁を一つ一つ越えて行かれる姿に何度も出会って来ました。
重い病気を抱えた多くの皆さんは気軽に家族で舞台を観に行けません。いや、舞台に限らず旅行や外食だって簡単には出来ません。外出も。
私は劇団四季で3000回以上の舞台（オペラ座の怪人・美女と野獣・キャッツ等）に立って来ましたが、観に行きたくても行けない方が世の中には沢山いらっしゃる事を改めて痛感した22ヶ月間

2．馬偕記念病院本院（台北）小児病棟の廊下での公演。
皆で子ども達が大好きな音楽で歌って踊る様子。

でした。中々舞台を体感することが出来ない人にほどプロの本気の舞台が必要です。家族で作る思い出、支えてくださる方々と作る思い出が本当に大切です。
病気の有無に限らずどんな人にとってもシンプルに『今日を生きよう』と言うモチベーションを持つ事は本当に大切な事です。心魂プロジェクトの活動がそのモチベーションを生む一つのきっかけになって欲しいと願って私達は難病のこども達・ご家族にパフォーマンスをデリバリーする活動【心魂デリパフォ】を行っています。

心魂プロジェクトは毎月平均４回前後、病院や施設、病児の団体、統合保育園、特別支援学校等に無償、ないしほぼ無償の心魂デリパフォを行っております。詳しくは心魂公式ホームページ http://cocorodama.webcrow.jp をご覧ください。
（心魂公式 Facebook ページ https://m.facebook.com/cocorodama では常に最新の活動報告をご覧頂けます。）
私達の本拠地は神奈川・横浜に有りますが活動エリアは関東に限らずこの 22ヶ月の間に北から福島県・宮城県・新潟県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・静岡県・愛知県・京都府・大阪府、長崎県そして台湾で心魂デリパフォをして参りました。2016 年は北海道や熊本県にも活動の輪を広げて行く予定です。

【会場に来ていただくことは難しい】
《《それなら私達が行く》》
私達は使命感を持って突き進んでおりますが、劇団四季の頃と違って毎回公演をする場所は様々です。大きい病院内イベントスペースの事も有れば、病棟の廊下、場合によっては病室と与えられた環境は毎回違います。劇団四季時代は俳優は役を体に叩き込んで体調管理さえすれば大丈夫でしたが活動資金が常にギリギリな状態で運営されている心魂では俳優が舞台の設営から音響セッティングまで全てをやります。
台湾ツアーでは劇団四季ミュージカル美女と野獣でメインキャラクターのポット婦人を演じていたメンバーが照明をしながらコーラスをしました。劇団四季では考えられないような事も《《私達が行く》》と言う想いでメンバー全員が動いています。

今私達が行ってる活動の難しさ、それは患者さんによって様々な工夫をしなければいけない事です。こんな事が有りました。PA 機材をセッティングしていざリハーサルを始めたら、「今日大きな音を聞くとひきつけを起こしてしまう子が来ることになったので音は抑えて欲しい」とリクエストが入り、急遽スピーカーを使わずに生声で行う公演に変更しました。とは言いましても会場は大きいので皆が楽しめる様に生声のバランスを自分で調節しながらの公演で相当神経を使います。
又こんな事も有りました。空気感染が有ると命に関わるのでガラスのこちら側からパフォーマンスをするような公演。どうやったらガラスを通しても熱量が伝わるのか。その回の公演から見て楽しめるキャラクター達が心魂に生まれて行きました。

３．馬偕記念病院・新竹院区、ホール公演。【デリバリーオブデリバリー】
　１人１人の手を握りながら歌う様子

私達にとってもっとも大きな挑戦は一番最初にやって来ました。
通常のミュージカルでは『演じる側』と『客席』には壁が有って我々演じる側は【見せる踊り・芝居】【聞かせる歌】をしています。一度に 1000 名以上のお客様に楽しんで頂くにはそのスタイルが一番平等であり、効率的です。
私達も一回目の心魂デリバリーパフォーマンスで舞台上からのミュージカルをしました。お客様の中には重症心身障害の方々が沢山いらっしゃいました。

4．馬偕記念病院本院（台北）公演が終わり、一緒に公演を作り上げて下さった
　病院スタッフと心魂プロジェクトメンバー全員で撮った記念写真。

車イスに座ったり、会場に敷かれたマットに横になってらっしゃる方々。患者さんご自身が見る場所を選んだ訳では有りません。重症心身障害とは重度の肢体不自由と重度の知的障害が重複した状態の方々です。
心魂一回目のデリバリーパフォーマンスで私達は見せる踊り・芝居、聞かせる歌を舞台と言う遠い場所からやっていたのでは駄目だと強く感じました。皆さんの心に響いてないのが手に取るように分かったからです。
今までやって来たことが通用しない事を痛感しました。どうしたら良いのか？

第二回目の心魂デリバリーパフォーマンスを上演する前に私達はある病院でスヌーズレンと言う活動に出会いました。
病院にはスヌーズレンの部屋が有りそこにはどんなに障害が重い人達でも楽しめるように、光、音、におい、振動、温度、触覚の素材等を組み合わせた楽しい物達が一杯有ります。
五感を刺激し、五感で楽しめる部屋なのです。
【これだ！！】
より五感を刺激するパフォーマンスへのシフトチェンジです。
私達は舞台に全員居てパフォーマンスするスタイルから一人一人の目の前に飛び出して行くパフォーマンススタイルへと大きく舵をきりました。勿論誰かは前に残ってパフォーマンスをしていますが、他のメンバー全員が客席を舞台に変えます。
【一人一人の目の前で繰り広げられる踊り・歌】
ダンサーが踊ると様々なアロマの香りも踊り、こども達の手を握るとギュって握り返してきます。音に反応し虹色に光るキラキラライトを目で追うこども達。
【デリバリーオブデリバリー】
パフォーマンスを会場にデリバリーするだけでなく一人一人の元にパフォーマーが更に飛び出して行く心魂のパフォーマンススタイルが生まれました。するとどうでしょう、会場中の空気が一斉に呼吸し始めました。それは感動の瞬間でした。私達が必死に鍛え上げて来た技術がやっと社会に真の意味で必要とされる事を実感した瞬間でした。

一つの情報を多くの人が共有する時代、そこに体温が有るか無いかは置き去りにされ、利益追求の為に効率的に生きることを求められる日本で私達がしていることは真逆に向かっています。効率も非常に悪い。ですが、人は機械では有りません。
私達は一人一人に向かっていく表現スタイル、そしてそれを支える心のデリバリーを追求して行きます。
今は活動資金に限界が有るために無償での活動は難病のこども達に関係する公演のみとなっていますが、高齢者施設や養護施設等中々生の舞台に触れられない方々へプロが本気で行う心魂デリパフォには多くのニーズが生まれてきています。

心魂プロジェクトは定期的に一般有料公演を開催し、その収益を使って無償の活動をしています。

又最近は高齢者施設での有料公演・ロータリークラブ公演・学校での芸術鑑賞・企業での社員教育・看護学校での講演等の依頼が増えました。その収益も活動資金の一部となっております。今年６月末に『NHK・おはよう日本』で十分程紹介して頂いた頃から多くの支援を頂くようになりました。成熟した日本の社会にあって開拓者として生きれること、そして豊かな出会いに恵まれている事に深く感謝しながら私達は今を生きています。
走りたての私達が今回の台湾ツアーで交流協会様からの御協賛と助成を頂けた事も本当に感謝な出来事でした。

私は両親の仕事の関係で５歳から15歳までを台湾で過ごしました。
両親はキリスト教の宣教師でしたので一般的な海外駐在の日本人家庭に育つこども達とは違って台湾の方々の中で育ちました。私の体は台湾の食物で育ち、私の心は台湾の方々の想いの揺りかごで育ったのです。
中学校を卒業した後一人親元を離れ帰国し、青山学院大学を経て時計メーカー CITIZEN グループ企業で中国語を生かして海外営業マンをした後、脱サラをして劇団四季に入団しました。
そして四二歳の時に劇団四季を退団して心魂プロジェクトを立ち上げました。脱サラした時も、独立した時も多くの人は私の決断を理解はしませんでした。
【何故経済的安定を捨てる？】
しかし、私が自分の人生に対して守りに入らず常に攻め、信念を貫く人生を選んで来た結果、最も私らしく生きることが出来る道に出会い・生まれてきた意味に出会うことが出来ました。それが心魂の活動です。
そして、守りに入らずに攻める姿勢を最も学んだのは台湾です。
振り返ってみると台湾で出会った多くの人々が私の心を磨いてくれたと感じずにはいられません。
ですから私は心魂プロジェクトを立ち上げた時に必ず台湾への活動もすると決めていました。私に出来ることを台湾へ。

５．馬偕記念病院・新竹院区、ホール公演。キリスト教の病院という事で総合プロデューサーの寺田真実がゴスペルを歌う様子。

台湾の病院ではまだこども達に向けての様々な活動は多くありません。日本でもそうですが、病院は一般的に我慢をする所になっています。
でも、何回も何回も治療を受けるにはモチベーションを上げることが必要です。毎日単調に続く病院生活の中で私達の様に外から新鮮な空気を病院に持ってくる活動はモチベーションアップの為にとても重要です。
【病院にも楽しい事が有る！】
そう感じる事はとても大切です。
私達は2015年１月に６名で初めて台北 Mackey Memorial Hospital 様に心魂デリパフォをしました。その時は病院側スタッフもそう言った活動に慣れていない状況でした。勿論患者さんの方も同様で私達が病棟の廊下でパフォーマンスを始めるまで誰もドアを開けません。でも、パフォーマンスが始まり歌が聞こえて来ると少しずつドアが開きひょっこりとこども達が顔を出す。
『私も大きくなったら踊ったり歌ったりする人になりたい』と言ってくれた少女の言葉に大きな勇

気を貰いました。
私以外のメンバーは中国語を話せませんから生演奏・ダンス・踊りを組み合わせ、言葉が分からなくても必ずこども達が知っているディズニーソングを多く使用してパフォーマンスを構成しました。不安が無かったと言えば嘘になります。受け入れて貰えるのか？
ただパフォーマンスをしながら見えたのは日本で重症心身障害の方々と言葉は必要ない部分で繋がって来たと言う景色です。言葉は話せたら良いかもしれない、でも人と人は心で感じ合う事が出来ます。そしてそれこそが最も素晴らしい事だと重症心身障害の方々に教えて頂きました。ですから結果的には皆自信を持って台湾第一回目の心魂デリバリーパフォーマンスをしました。その時に私達のパフォーマンスにとても感動して下さった副院長がおっしゃって下さった言葉
『次は台湾国内の移動費と宿泊費を病院が負担するから四つの地域の病院に来て欲しい』
その日から第二回目・夏の台湾ツアーに向けての準備が始まりました。

一番怖いのが費用を抑える為に一回目の時は一日に一便しか飛ばない格安フライトを使いましたが台風のシーズンに一日に一便しか飛ばないフライトを使った場合は何か有った場合は台湾にさえ行けないと言う事です。又第二回目は長い日程を組むことになりましたから体力的にきつくなる時間に日本を出発するフライトを利用すると歌い手の声の質が落ちたり、ダンサーが怪我をしやすい状況を作ってしまいます。一般の方々には中々ご理解頂けませんが、プロのパフォーマンスは繊細なバランスの上に生み出されています。
私はプロデューサーとしてそこを何とかしたかった。
そこに交流協会様から助成金を頂けるとのお知らせを頂きました。本当に感謝でした。助成金を

6．馬偕記念病院・新竹院区、ホール公演。ミュージカルナンバーを歌い踊る様子。

使って一日に何便も飛んでいるJALを利用し、体力が守られるフライトで台湾入りできた事は私達に大きなアドバンテージを与えてくれました。

第二回の台湾ツアーで私達が加えた新しい演出はフラッシュモブ。
女医や掃除の叔父さん、妊婦に扮したパフォーマーがお客さん側に紛れ、タイミングが来るといきなり芝居をしながらパフォーマンスに加わって来ます。新しく驚きが加わった心魂のパフォーマンスにどんどん人混みが増えこども達だけでなく家族の歓声が沸きました。
一緒に歌い出すこどもと共にどんどん集まる看護婦さん達。
二回目の台湾ツアーを終えて副院長は今度はこうおっしゃいました。
『病院には踊ったり歌ったりが得意なスタッフが沢山居る。私たちもトレーニングをしてこども達にパフォーマンスをする。』
日本でも聞いたことの無いようなアイディアを口にされた事が本当に嬉しかったです。近い将来病院スタッフの皆さんとのコラボレーションをするかもしれないと楽しみにしています。
2016年も夏に台湾にデリパフォを行う予定です。
こう言った活動は通常海外から日本に入ってきま

す。ですが私達はプロのアーティストが本気で進めるデリバリーパフォーマンスと言う活動を日本で磨いて輸出して行きたいと願っています。
ミュージカルと言う総合芸術と日本人が持っている【思いやり、寄り添う】と言う才能を融合させて心魂デリパフォは進んで参ります。

私達のような活動がプロのパフォーマーからどんどん生まれる事を祈りつつ

心魂プロジェクト総合プロデューサー
寺田真実

7．馬偕記念病院さんが作成して下さった、チラシ

皆さま初めまして、【特定非営利活動法人　心魂プロジェクト】代表理事の有永美奈子です。九月の台湾ツアーを終えたすぐあと「心魂プロジェクト」は正式に認証を頂き NPO 法人として新たな一歩を踏み出しました。
全国の病院や施設などから毎日の様に届く「私達の所に来てほしい！」のお声にお応えできる様、今必死でこの活動を強く確かな物にする為の組織作りを行っております。
日本・関東を中心に活動を行う中で、先日の台湾ツアーは新たな気づきや学び、成長の機会を得る事が出来ました。

今回伺った Mackey Memorial Hospital さんでは、私達を迎える為に四病院の間で何度もテレビ会議を行い準備をして下さいました。日本にいる我々とも何度もメールのやり取りを行い、必要な機材を用意、公演を行う場所や時間の相談など細かい事まで綿密に打合せを重ねて参りました。それを踏まえ私達も公演プログラムを全て用意してからの台湾渡航となりました。

しかし実際に現場の雰囲気を見てみると準備してきた公演プログラムでは充分に喜んで頂く事が出来ないと気が付きました。
『年齢層・音響の環境・病棟の雰囲気・患者さんの症状』それらを考えて毎回公演内容を決めています。しかし、台湾ではそれだけでは足りませんでした。
『国民性の違いや馴染みのある曲の違い、ご年配の方々は歴史的な背景』などなど・・

一日目の公演を終えお客さまとなる患者さん達の反応を見た結果、日本から用意した全てのプログ

ラムを白紙に戻し作り変える事を決めました。
「喜んでもらいたい」という想いは一つですので、反対するメンバーは１人もいません。
その日から毎晩ホテルでのミーティングが恒例となりました。

例えば、台東の病院では朝八時から、計４回の公演を場所を変えて行いましたが、全て対象となる方々の年齢層も、症状も、環境も上演時間も違いました。
そこで全ての公演の構成・曲目・内容を違う物にする事にしました。

そうして行われた病院での公演【デリバリーオブデリバリー】。お一人お一人と、手を握り温もりを分かち合いながらのパフォーマンス。

子ども達は、はにかみながら笑顔でハイタッチをしてくれました。
ご年配の方々は、ギュッと力強く手を握り返して「ありがとう」を伝えて下さいました。
病院スタッフの方々は一緒に・・いや誰よりもノリノリで楽しんで下さいました。
そしてお母さん・お父さんたちは子供の笑顔を嬉しそうにのぞき込んでいました。

笑顔の連鎖が生まれました。

今回の台湾公演は、日本で公演を行うよりもずっと難しい環境でした。しかも全プログラムを変えるという大きな挑戦の連続。
そこで頂いた、皆さんの笑顔は私達に大きな自信を与えてくれました。
「これでいいんだ」という確信も。

公演ごとに内容を変える勇気・柔軟性そして経験・言葉に頼らない心のコミニケーション
それらを生かして、今後より多くの方々に喜んで頂ける活動を推し進めて行きたいと思います。そして、更に成長して台湾に帰りたい。

最後に、寺田からもご紹介させて頂きましたが我々の公演活動報告などはホームページでご覧頂く事が出来ます　http://cocorodama.web-crow.jp/

【ワクワク・ドキドキ・感動は全ての人に与えられた権利である】
その想いを胸に、心魂プロジェクトは日本全国・海外にパフォーマンスをデリバリーして参ります。どうぞ私達の活動を応援してください。
よろしくお願い致します。

特定非営利活動法人　心魂プロジェクト
代表理事　有永美奈子

台湾通信

「カラスガイナイ・・・ゴミヤシキガフエル！？」

文　高雄事務所　坂田　／　写真　高雄事務所　大辻

今台湾では、日本の街角に「のほほーん猫」が寝ている姿が大変話題になっております。
ツイッターなどでは、猫マニア、そうでない人でも、「わぁーかわいい。」パシャなのである。

そういえば、台湾には「のほほーん猫」をほとんど見かけない。「のほほーん犬」はみかけるが。もっともこっちは、みんな老犬でよたよた歩いて

食べ物が豊富な観光地でさえカラスはいない

いるのだが、ある意味「のほほーん犬」である。

ここで本題。今回は、「カラスガイナイ・・・ゴミヤシキガフエル！？」というお話。ごみに関するお話である。

外国人観光客は日本の街頭にごみ箱がないことに困っているという話もよくきく。まぁ、それ以上にごみ箱がないのに街がきれいという話もよくきくが・・・。

また、日本に長く住む外国人が、一番厄介に思うことの一つが「ごみの問題」である。そう、環境に配慮した細かい分別、何曜日は「燃やすごみ」（注：現在は「燃えるごみ」という呼称ではない。）何曜日は「資源ごみ」はたまた「乾電池」「蛍光灯」は○○集積場までといった具合である。

台湾はどうであろうか？そもそも日本でよく見かける、「ごみを集めて防護ネットをかけて」を見ないのである。ごみを回収するのは、音楽を掛けながらやってくる「しあわせの？黄色いトラック」なのである。街角にゴミ集めておく場所がないから当然にして、カラスのエサがないわけで、台湾の街でカラスを見かけることは、ほとんどない。これがカラスがいない理由である。

日本の街角と違い、どこを見ても防鳥ネットのごみ置き場がナイ

では、カラスがいないこととごみ屋敷がどうつながるかであるが、夕刊○○みたいで申し訳ないが、残念ながら直接はつながらないのである。「風吹けばおけ屋・・・」を題名からご想像された方すいません。世の中そんなに都合がよくない。

台湾では、ごみを捨てるのは、面倒くさいが毎日来るごみ回収車まで運びさえすれば、家の中にはゴミがたまることはない。台湾人は綺麗好きである。なれれば、すごく便利である。日本のように、出し忘れて来週まで・・・がないからである。

では、ごみ屋敷はどんな時にできてしまうかであるが、答えは、「夜逃げ」である。

日本では、仮に借金取りが家の前に来るような場合でも、コンビニで食べ物を調達したり、当然時間を見計らってゴミもごみ置き場に置いとくこともできるわけだが、台湾にはそれがないから、置いておけないのである。

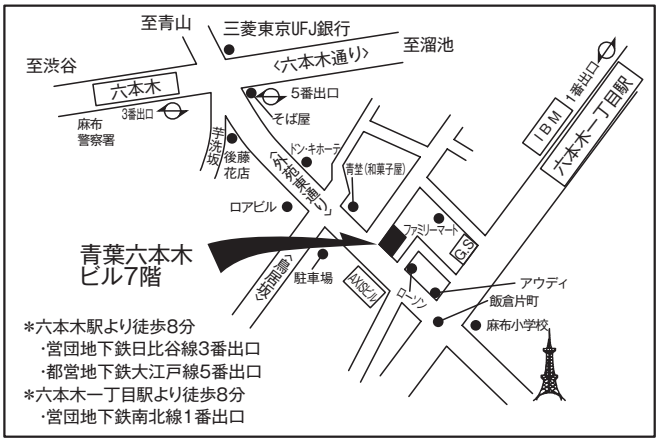
したがって買い物には行けても、ごみを出すわけにはいかないのである。つまり、夜逃げをした家は100％ごみ屋敷になってしまうのである。

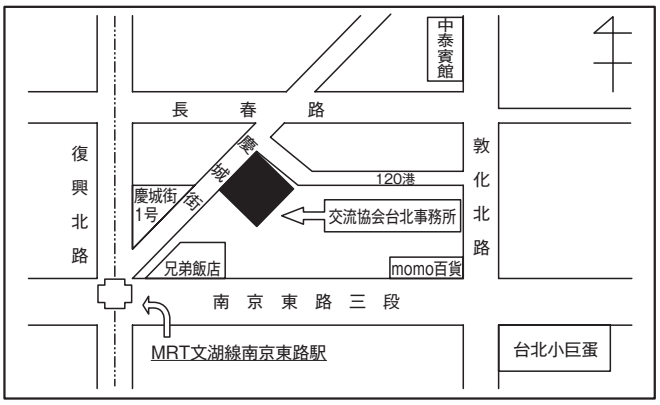
台湾のごみ屋敷は、生活感のあるゴミで溢れかえったごみ屋敷なのである。

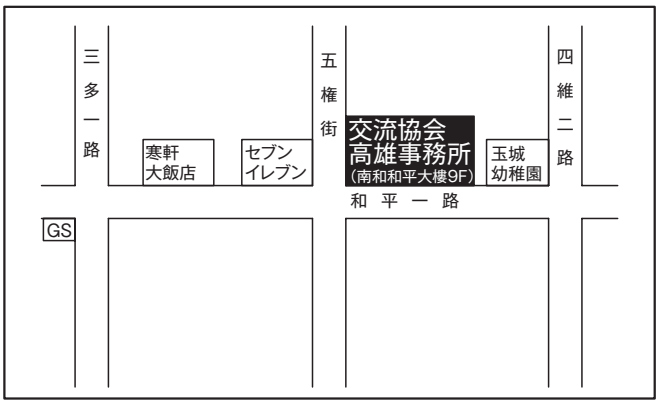
どこを見てもカラス一匹…飛んでない

交 流　2015年10月　*vol.895*

平成27年10月26日　発　行
編集・発行人　舟町仁志
発　行　所　　郵便番号　106－0032
東京都港区六本木３丁目16番33号
青葉六本木ビル７階
公益財団法人　交流協会　総務部
電　話（03）5573－2600
ＦＡＸ（03）5573－2601
ＵＲＬ http://www.koryu.or.jp
表紙デザイン：株式会社　丸井工文社
印　刷　所：株式会社　丸井工文社







台北事務所　台北市慶城街28號　通泰大樓
Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st.,Taipei
電　話（886）2－2713－8000
ＦＡＸ（886）2－2713－8787
URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3 contents.nsf/Top

高雄事務所　高雄市苓雅区和平一路87号
南和和平大樓９Ｆ
9F, 87 Hoping 1st. Rd.,Lingya Qu,kaohsiung Taiwan
電　話（886）7－771－4008（代）
ＦＡＸ（886）2－771－2734
URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3. contents.nsf/Top

日本と台湾との架け橋

公益財団法人

交流協会

Interchange Association,Japan(IAJ)